國學院大學学術情報リポジトリ

國學院大學図書館所蔵『ひいな鸞』の解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 針本, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000628

國學院大學図書館所蔵『ひいな鶴』の解題と翻刻

針本正行

はじめに

國學院大學図書館に絵巻物の体裁を持つ『ひいな鶴』（國學院本）が収蔵された。『ひいな鶴』は、『御伽草子』二十三篇の一つ『さゞれ石』と同じ趣旨であるが、本文は大きく異なる。すでに、『ひいな鶴』は、詞書と絵を持つ穂久邇文庫蔵『さゞれ石』[1]（一軸、穂久邇本）、国会図書館蔵『鶴亀松竹物語』（上下二軸）などが確認されている。また、國學院本は、冒頭に「それあめつちひらけはしまりしよりにんわうのみよとなりめてたき事はしんむてんわうより十三代にあたらせたまふみかとをはせいむてんわうとそ申けるこのみかとはたみをあはれみ國をめくみはんきのまつりことおたやかにまし〳〵けるそのうへわうしあまたもたせたまひしか」とあるように、祝儀物特有の語りはじめを持つ。石川透氏により報告された『笠間長者鶴亀物語』[2]の冒頭近くにも、「ここに、人皇第六代に、あたらせ給ふみかとをは、かうあん天皇とそ申奉りける。このみかと、世をおさめまし〳〵て、くにのまつりこと、すなおにして、御めくみ、あまねく、四つのうみのほかにをよひけれは、あめつちも、これにかんして、ふく風、えたをならさ

す、ふる雨、つちくれをやふらす、たなつもの、はたつもの、ゆたかにみのりて、民さかへ、くににそむくものなけれは、はこふみつきのかすゝは、月にかさなり、日にそひて、おさまれる世のしるしとす」とあり、『ひいな鶴』が成務天皇の威徳[3]を、『笠間長者鶴亀物語』は孝安天皇の威徳を語っている。『ひいな鶴』の書名の由来は、「やくしのみなをとなへよもをくはんしておはしけるところへいつくともしらすまなつるつかひとひきたりまつのえたにすをくふてうたひけるはまつのえたにはひなつるのすたつをみれはうこきなきいはほのかたにゐるかめのちよよろつよとかきりなくいはふはきみかためなれや」による。なお、『さゞれ石』を『ひいな鶴』と書名にすることは、現在のところ本古典籍のみのようである。

では、國學院本『ひいな鶴』を全文翻刻し、挿絵の構図の概要を示すことを通して、國學院本『ひいな鶴』の特徴を明らかにしたい。書写年代は、江戸時代前期の寛文・延宝期と思量される[4]。

【書誌】

一軸。表紙は牡丹紋金襴緞子、料紙は鳥の子紙で下絵は金泥草花文様。題箋は縦十六糎・横三・五糎、「ひいな鶴」とある。紙高は三三・二糎、長さは凡そ一〇・五三米。挿絵は六図（内長大図が一図）。

一、國學院大學図書館所蔵『ひいな鶴』の本文

國學院本と穂久邇本との成立過程について、本文の相違の検証を通して述べてみたい。

國學院本と穂久邇本との本文異同はあまりないが、次のように、國學院本には脱落と思量されるものがある。

1國　それあめつちひらけはしまりしより・・・・にんわうのみよとなり
1穂　それあめつちひらけはしまりしよりこのかた人・皇・の御代となり　（一四三頁）
2國　しいかくはんけんのみちくらからすきやうろんしやうけうにいたるまて一事・とゝこほりたまふ
2穂　詩・哥くはんけんの道・くらからす経・・・ろんしやうけうにいたるまて一字もとゝこほり給・ふ　（同頁）
3國　・・・・・・・ふつたうにすきたる事・はあらじ・・ふつだうをねかふにはまつ・・・ほつけ
3穂　とにもかくにも佛・道・に過・たることはあらしまつ佛・たうをねかふには・・ことにほ・け　（同頁）
4國　しておはし・・けるところへいづく・・・・とも・・しらずまなつるつかひとひきたりまつ
4穂　しておはしましけるところへいつくより来るともなく・・・まなつるつかひとひきたり松・　（同頁）
5國　まつのえだにすをくふてうたひけるは・・・・・・・・
5穂　松・のえたにすをくふてうたひける・こそふしきなれ　（同頁）
6國　かなとうたひてはまひあかり・・・・てはうたひまひあそひたはふるゝ
6穂　かなとうたひてはまひあかりまひさかりてはうたひまひあそひたはふるゝ　（同頁）
7國　ありさまはまこと・めてたき・・・事ことなり
7穂　・・・・はまことにめてたきためし・・・なり　（同頁）
8國　また雲にのりてこくうにあからせたまひけり・
8穂　又・雲にのりてこくうにあからせ給・・・・ふ　（一四五頁）
9國　ようかんはしたいに・・・・・・まされともすこしもせうすいしたまはす・・みたてまつる
9穂　ようかんはしたいによくみえたまへ・・・ともすこしもせうすいし給・はすしてみたてまつる　（一四六頁）

10國　つかへたてまつるもひとへにたしやうのきえんなれと・・・・・・・・・・・・をの〳〵こゝろを
10穂　つかへたてまつるもひとへにたしやうのきえん・・といひなからありかたくてをの〳〵心・・を　（同頁）
11國　御かたちもかはらすめてたくこそさかえたまひけれまことにたつとむへき事・ともなり
11穂　御かたちもかはらすめてたくこそさかへ給・ひけれまことにたつとむへきことゝもなり　（一四九頁）
12國　なむやくしるりくはうによらいありかたし〳〵・・・・・・
12穂　なむやくしるりくはう如・来・ありかたし〳〵めてたや〳〵　（一四九頁）

1・3・4・5・6・7・9・10・12の國學院本と穂久邇本との本文比較において、穂久邇本「このかた」・「とにもかくにも」・「より来る」・「こそふしきなれ」・「まひさかり」・「ためし」・「よくみえたまへ」・「いひなからありかたくて」・「めてたや〳〵」とあるところ、國學院本には当該本文がない。なお、御伽草子『さゞれ石』の巻末は、「上代も末代もかかるめでたきためしなし。今は末世のこと、かほどにこそはおはせずとも、神や仏を念ずる人は、やはかそのしるしなかるべき。南無薬師瑠璃光如来南無薬師瑠璃光如来、唵呼嚧呼嚧戦駄利摩墘祇莎訶唵呼嚧呼嚧戦駄利摩墘祇莎訶」[5]と、薬師如来の効験を祈る呪文で終わっている。用字法においては、國學院本「たまふ」とあるところ、穂久邇本「給ふ」とし、また、穂久邇本「詩哥」・「佛道」とあるところ、國學院本は「しいか」・「ふつだう」などとひらがな表記となっている。

以上から、國學院本『ひいな鬻』は穂久邇本のそれより後に成立したと思量される。

二、『ひいな靄』の挿絵の構図概要

『ひいな靄』の挿絵は六図ある。構図の概要について、御伽草子『さゞれ石』を参照しながら述べてみたい。

第一図は、成務天皇の末の姫宮が、十四歳の時、摂政の北の政所に立ったことを帝の前で披露された場面である。本図は二紙分の長大図で、一紙目に、楼門の外に旗を持つ官人四人、従者二人、祝儀を象徴する松が描かれ、二紙目に左御簾の奥に天皇、その右に姫宮が扇で顔を隠して座っている様子が描かれている。また、左画面端に、画中画として水墨画が描かれた障子が配されている。登場人物である天皇の全体像が描かれていないのは注目される。

なお、御伽草子『さゞれ石』の第一図は姫宮が摂政の北の方として幸福な生活を送っている場面となっている。

第二図は　姫君が、広縁で薬師の名前を唱えたところ、つがいの真鶴が飛来して、「まつのえだにすをくふてうたひけるはまつのえたにはひなつるのすたつをみれはうこきなきいはほのかたにゐるかめのちよよろつよとかきりなくいはふはきみがためなれやこゝろもきよきいけみつのすめるはひろきめくみかな」と歌った場面である。画面中央に松を描き、庭に真鶴が舞い降りている。左には姫君と六人の侍女が描かれている。中央で、両手を真鶴に差し出しているのが姫君であろうか。

第三図は、真鶴が飛来し歌を歌ったことに不思議に思った姫君が、その意味を博士に占わせ、博士が占いの結果を姫君に勘申した場面である。画面右に、松、中央の縁に占い博士、博士の前には二種類の文書が置かれている。左の書は占いの書か、右のは占いの結果を記した書か。占いの内容は、「きみにてわたらせたまひければえん國はん里のはたうまてもうこきなくおさまるへし」と、国の隅々までが安寧であること、もうひとつは、「またひめきみの御いのちはちとせかあひたもくちすまじき」と、姫君の長寿のことが認められていたと推測される。姫君は左の奥の部屋

で几帳の中に座している。画面手前に三人の侍女、中央の縁には二人の童がひかえている。

第四図は、金比羅大将が薬師如来を信仰する姫君の前に天空から現れた場面である。大将は、「われはこれやくしの十二じんのうちこんひら大しやうなりとてるりのつほをとりいたし」と、自らを名告り、姫君に瑠璃の壺を渡している。画面右は瑠璃の壺を持った金比羅大将が雲に乗って地上に降りてきた図となっている。大将は、薬師如来の使いとして、壺の薬を舐めると、「御いのちもつきず心にかなしき事もなくいつもわかきすかたにてわたらせたまふへし」と、長寿、永遠の美貌が約束されると言って、天空へ帰っていく。なお、本場面は、御伽草子『さゞれ石』でも金比羅大将が瑠璃の壺を持って紫雲に乗ってきた図となっている。

第五図は、姫君が、顕現した薬師如来に「あらありかたの御事やおなしくはにようらいのすませたまふしやうとをひとめおかみたてまつらはや」と祈ったところ、浄土の世界（東方浄瑠璃世界）が地上に写したとられた場面となっている。地上は、「にはかに花ふりおんかくきこえしうんみち〳〵ててんにんはあまくたり」となった。場面右に浄土を象徴する鳳凰が描かれ、五人の天人が音楽を演奏している。姫君は中央で両手を合わせ、その後ろに僧侶が立っている。なお、御伽草子『さゞれ石』では、姫君を浄瑠璃世界へ導く図となっている。

第六図は、成務天皇が薬師如来の効験を讃えた場面である。画面左奥、御簾の中に成務天皇、手前に姫君、左右に公卿が八人描かれている。若々しい容貌の姫君の様が象徴的である。『ひいな靏』は、成務天皇が仲哀天皇に譲位した後も、姫君と同じく薬師仏を信仰した結果、「御いのちもなかくなり御かたちもかはらすめてたくこそさかえたまひけれまことにたつとむへき事ゝもなりなむやくしるりくはうにようらいありかたし〳〵」であったという、薬師如来の効験を讃えて終焉している。なお、本図は、もともと本作品最後の散らし書きになっている詞書「たみのかまともにきやかにてかんここけむしてとりおとろかぬみよにもこえたり」の後に位置していたのでないかと思量される。

三、國學院大學図書館所蔵の奈良絵巻・奈良絵本

國學院大學図書館には『ひいな鶴』と同時代に制作されたとされる絵入り物語が複数収蔵されている。『舟のゐとく』・『呉越絵』・『住吉の本地』である。これらの作品に共通するのは、参考図④から⑦に掲出したように、同一構図を有することである。④は、『ひいな鶴』において、姫君の薬師信仰のたまものとして、姫君が東方浄瑠璃世界を地上に写しとった場面である。この④における、全体の構図、邸の屋根の色使い、床の模様、人物の造型方法などが、⑤『住吉の本地』[6]、⑥『呉越絵』[7]、⑦『舟のゐとく』[8]と酷似している。⑥は、呉王夫差が臣下と謁見している場面であり、⑦は、貨狄と揚基が皇帝に拝謁する場面である。内容が異なる物語の挿絵が似ていることは、同一の絵草紙屋による制作の可能性があるのではないか。『呉越絵』の絵師は、『呉越絵』が納められている箱の内側に「呉越ものがたり　傳　狩野長信筆」とある。伝承絵師の狩野長信は、江戸時代初期の狩野派の絵師として、寛永期に活躍したようである。『ひいな鶴』の絵師が『呉越絵』の絵師であるとすると、やや時期が早く、『呉越絵』の絵師と断定できないので、『ひいな鶴』をはじめ、『住吉の本地』、『呉越絵』、『舟のゐとく』について実在の絵師を確定することは難しい。

また、『舟のゐとく』・『呉越絵』及び國學院図書館所蔵『羅生門』の詞書書写者が同一であると指摘したことがある[9]。石川透氏は、國學院大學図書館所蔵『竹取物語絵巻』二点（武田祐吉博士旧蔵本及びハイド旧蔵本）の詞書書写者が、埼玉県立歴史と民俗の博物館所蔵『太平記絵巻』、アイルランド国ＣＢＬ所蔵『俵藤太物語』・『舞の本絵巻』、慶應義塾大学斯道文庫所蔵『竹取物語絵巻』などとも同じであると論究されている[10]。なお、石川氏は、國學院大學図書館所蔵『住吉物語』（三冊本）の各冊の末尾にある、陰刻「源小泉　大和大極」、陽刻「烏丸通櫻馬場町　御繪雙屋大和小泉」という印記に注目されて、この印記が、ボストン美術館所蔵『天狗の内裏』、フリーア美術館所蔵『玉

藻の草子』などにもあり、朝倉重賢を詞書書写者とするものの一つの特徴であるとも指摘されている。[11] ただ、『ひいな鶴』の詞書書写者については、『呉越越』、『舟のゐとく』と同一であるといえないし、朝倉重賢であるとも安易に断定することは避けたい。

國學院大學図書館所蔵『ひいな鶴』をはじめ、『呉越絵』・『舟のゐとく』・『住吉の本地』・『羅生門』などの物語絵巻は、江戸時代前期に、京都に存在していた「大和小泉」のような絵草子屋が制作していたと思量されるのである。

注

（1）『室町時代物語大成　巻六』（角川書店、昭和五十三年）。

（2）石川透氏「〔笠間長者松竹物語〕解題・翻刻」（『三田国文』第二四号、平成八年十二月）。

（3）『ひいな鶴』が成務天皇の威徳を語ることからはじまることは興味深い。『古事記』において、成務天皇の記述は「若帯日子天皇、近淡海の志賀の高穴穂宮に坐して、天の下を治めき。此の天皇、穂積臣等が祖、建忍山垂根が女、名は弟財郎女を娶りて、生みし御子は、和訶奴気王。故、建内宿禰を大臣と為て、大き国・小き国の国造を定め賜ひ、亦、国々の堺と大き県・小き県の県主とを定め賜ひき。天皇の御年は、玖拾伍歳ぞ。御陵は、沙紀の多他那美に在り。」（二四〇～一頁　新編日本古典文学全集　小学館）と、天皇の系譜、国々の境、県主などの他、天皇の九十五歳を寿ぐものとなっている。次の仲哀天皇から応神天皇までの物語は一続きとなっているので、『ひいな鶴』の時代設定は、古代天皇の系譜を念頭においていたことになる。

（4）石川透氏「第四編　太平記絵巻奈良絵本・絵巻類　第三章　太平記絵巻・絵本の制作」（『奈良絵本・絵巻の成成』三弥井書店　二〇〇三年）のご論の成果に基づく。

（5）御伽草子『さゞれ石』の本文は、新編日本文学全集（小学館）を用いた。

（6）國學院大學図書館所蔵『住吉の本地』三巻（貴　一一〇七～一一〇九）

（7）『呉越絵』の翻刻、『呉越絵』と『舟のゐとく』の構図の酷似性については述べたことがある（針本正行・山本岳史「國

學院大學図書館所蔵『呉越絵』と翻刻・解題」（『國學院大學　校史・学術資産研究』第三号　國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター　平成二十三年三月）。

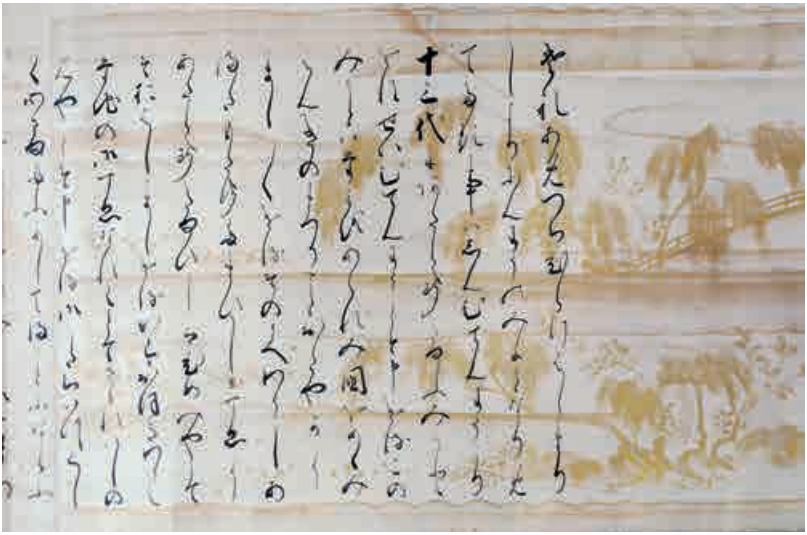
（8）『舟のゐとく』の翻刻は、針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵『舟のゐとく』と翻刻・解題」（『國學院大學校史・学術資産研究』第二号　國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター　平成二十二年三月）にある。

（9）國學院大學図書館所蔵の『羅生門』の調査結果として、『羅生門』・『呉越絵』・『舟のゐとく』・『張良』、これらの作品の詞書における「それ」・「國」・「人」・「乃」「代」・「あ」などの崩し方、料紙、下絵も同一であることを報告した（針本正行・山本岳史「國學院大學図書館所蔵『羅生門』と翻刻・解題」（『國學院大學　校史・学術資産研究』第四号　國學院大學研究開発推進機構校史・学術資産研究センター　平成二十四年三月）。

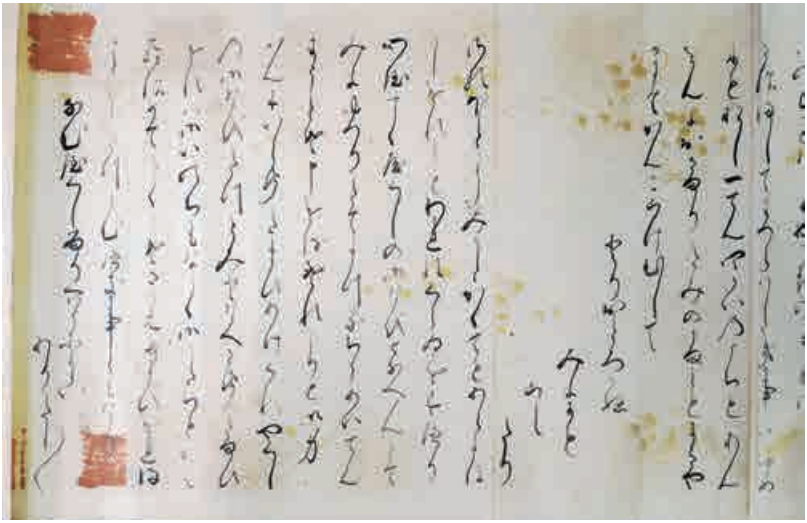
（10）石川透氏「國學院大學図書館所蔵の奈良絵本・絵巻」（針本正行編『物語絵の世界』七七～八六頁　平成二十二年）。

（11）石川透氏前掲（4）書「第五編　奈良絵本・絵巻の製作時期と製作者　第六章　絵草紙屋小泉の印記」四一四～八頁。針本正行も、國學院大學図書館所蔵『住吉物語』（三冊本）の各冊の末尾にある「烏丸通櫻馬場町　御繪雙屋　大和小泉」という印記について卑見を述べたことがある（「國學院大學所蔵の絵入り物語」『中古文学』第八十六号　平成二十二年十月）。

國學院大學図書館所蔵の古典籍の閲覧・調査にあたっては、館員の方々に多大なご配慮をいただいた。ここに感謝申し上げる。



参考図①『ひいな靏』巻頭



参考図②『ひいな靏』巻末

参考図③『ひいな霸』第一図

参考図④『ひいな靏』第五図

参考図⑤『住吉の本地』中巻第一図

参考図⑥『呉越絵』上巻第二図

参考図⑦『舟のゐとく』上巻第二図

ひいな靏（國學院大學図書館所蔵）翻刻

それあめつちひらけはしまり
しよりにんわうのみよとなりめ
てたき事はしんむてんわうより
十三代にあたらせたまふみかと
をはせいむてんわうとそ申けるこの
みかとはたみをあはれみ國をめくみ
はんきのまつりことおたやかに
まし〳〵けるそのうへわうしあ
またもたせたまひしかすゑに
あたらせたまひしはひめみやにて
そおはしましけるかすおほきわうし
たちの御すゑなれはとてさゝれいしの
みやとそ申ける御かたちいつくし
く心さまゆふにてしてまことにならふ
かたこそなかりけれみかと御てうあ
ひなのめならすいつきかしつき
たまひけるさるほとにかのひめ
きみ御とし十四さいにならせた
まひけれはせつしやうとのゝきたの
まんところにたゝせたまひけり
しいかくはん
けんのみち
くらから
す
きやうろんしやう
けうに
いたるまて
一事とゝ
こほり
たまふ
事
まし
まさす

〔絵　第一図（長大図）〕

あるときひめみやおほしめしける
やうはそれにんげんははかなき物なり
ふつだうにすきたる事はあらし
ふつだうをねかふにはまつほつけ
きやうはきやうわうとして第一なり
されは一のまきにはうへんとてこの
もんに十方仏土中ととかれしなれ
ばいつれも十はうは仏道なり中にも
とうはうしやうるりせかいにしくはあらじ
はんふつはじまり春をつかさとるなれ
ば人げんしゆつしやうのところなりこの
しやうるりせかいへむまれてこそはほんい
なれとてあけくれはをこたらすやくし
のみやうかうをのみとなへさせのたまひし
はありかたかりし事ともなりあるひ
のつれ〳〵にひめきみはひろえんに出
たまひやくしのみなをとなへよもをくはん
しておはしけるところへいつくとも
しらずまなつるつかひとひきたり
まつのえだにすをくふてうたひけるはまつ
のえたにはひなつるのすたつをみれは
うこきなきいはほのかたにゐるかめ
のちよよろつよとかきりなくいはふ
はきみがためなれやこゝろもきよき
いけみつのすめるはひろきめくみ
かなとうたひてはまひあかりてはうた
ひまひあそひたはふるゝ

ありさまはまこと
めてたき事
ことなり

〔絵　第二図〕

ひめきみは御らんしてさてもふし

きなる事かないかさまこれはめてたき
事なりうらなはせばやとおほし
めしやがてはかせをめされけれは
はかせ御まへにまいりてときのさう
こくさうじやう日のさうしやうをかんかへ
よこ手をはたとうちてさてもめてた
き事ともかなそれつばさおほし
と申せともつるはこれせんねんの
よはひをのふる物なりうたふこゝろはき
みにてわたらせたまひければえん國
はん里のはたうまてもうこきなく
おさまるへしまたひめきみの御いのち
はちとせかあひたもくちすまじき
とのうらかたなりと申けれはひめきみ
なのめにおほしめしいろ〳〵の
ひきでものをたま
はり
はかせはやとにそ
かへりける

〔絵　第三図〕

かくてひめきみはあるゆふくれの事
なるにさやかなる月のかけさし
いでたまふやまのはをなかめやりわか
ねかふなるしやうとはそなたそと
おほしめしこゝろをすましおはし
ましければこくうにをんかく
きこえ花ふりくだりしうんたな
びくをひめきみあやしみ御らん
すればくものうちよりひんづらゆ
ひうつくしきてんどう一人ひめきみ
の御まへにきたりのたまふやう
われはこれやくしの十二じんの
うちこんひら大しやうなりとてる
りのつほをとりいたしひめきみに

あたへのたまひけるはきみあまり
にやくしのみやうかうたつとくと
なへたまふ御心さししやうるりせかい
につうづそれがしを御つかひに
くたされしなり又このつほのうち
にらうやくありこれをなめたまはゞ
御いのちもつきず心にかなしき
事もなくいつもわかきすかたにて
わたらせたまふへし御いとま申
とてまた
雲にのりて
こくうに
あからせ
たまひ
けり

〔絵　第四図〕

さゞれいしのみやこのつほをうけと
り給ひあらありがたやこのとしつ
きねかひたてまつるかひありてかく
のことくのきずいにあふ事よとて
三とらいしたまひつゝらうやくを
なめてみたまへはまことにあまき
事ひとへにかんろと申ともこれ
にはすきしとそおほえけるさてかの
つほをよく御らんすれはるりのうへ
にしろきもしすはれりよみて
御らんすればうたなり
きみか代はちよにやちよにさゞれいしの
いはほとなりてこけのむすまて
となんありけりこれすなはちとうはう
しやうるりせかいのあるしやくしによら
いの御ゑいかなりそれよりやがて御
なをひきかへていはほのみやとそ
つかせたまひけるそのゝちとし

月ををくりたまひけれともいさゝか
物うき事もなく御としかさなれ
ともよはひをとろふる事もなく
ようかんはしたいにまされとも
すこしもせうすいした
まはすみたて
まつる人
をの〳〵ふしきの
おもひを
なしけり

〔絵　第五図〕

かくてひめきみもわかこゝろなからかゝ
るふしきなる事あらしとおほし
めしいよ〳〵たつとくてたゝあけ
くれはやくしのみやうかうをのみと
なへさせたまひける御みやつかへの
人〳〵もかゝるめてたきひめきみに
つかへたてまつるもひとへにたしや
うのきえんなれとをの〳〵こゝろを
つくしてみやつかへ申けるひめきみ
おほせられけるやうはいかにめん〳〵
きゝたまへわれかくめてたきよはひ
をのふる事もひとへにとうはうしや
うるりせかいのけうしゆやくしによらい
の御はからひなりかた〳〵もたつと
みせめてみやうかうをなりともとなへ
たまへとおほせけれは御まへのひ
と〳〵もけにかたしけなきした
いかなけふよりはいかにもしてやくし
のみやうかうをとなへはへらんと
てをの〳〵ひめきみの御けうけを
そきゝたまひけるそのときひめきみ
おほせけるいで〳〵やくしの
いとくをかたりてきかせはんへらん

それやくしと申たてまつるは三ぜん
せかいのけうしゆとしてとうはうしや
うるりせかいにぢうしたまふ
されはるりの二字はたまにとゝまる
たまにはなるゝとかけりその心はた
まといふはいのちなりそのゆへに
玉をもつてせかいのたからとせりこの
たからのいのちをこくうより人けん
にあたへたまふをやくしによらいうけ
とり給ふときを瑠といふてたまに
とゝまるなりさてまたこのたからの
玉のいのちをせかいのしゆしやうに
そなへたまふ璃といふてたまには
なるゝとかけりそれによつてとう
はうははるなりせかいのはしまるとこ
ろなりさればばんもつのしゆつしやう
するなり秋はちりてふゆはおさまる
なりこのおさまるところをねはんの

みやこといふなりかのとうばうはうより
そなへたまふたからのいのちをもと
のやくしにかへしたてまつるをき
みやうといふなりこのたひやくしによ
らいをたのみたてまつりきみやうの
ほんぐわいをとげたまへとのたま
ひければ御まへの人〳〵これをきゝ
まことにけうしゆしやくそんのをし
へをきく心ちしてみゝをすまし
くひすをつゐてゐたりしか御物かた
りをはりけれはをの〳〵かんるいきも
にめいしてを

あはせたつとみ

ける

〔絵　第六図〕

さるほとにひめきみはいよ〳〵た

つとくおほしめしをこたらすみや
うかうをとなへたまふあるときとも
しびをかゝげたゞひとりやくしの
しんもんのかんしておはしましけ
るかこくうよりいきやうくんし花
ふりくだるひめきみいかなる事や
らんと心をすましみやうかうをとなへ
おはしけれはかたしけなくもやくし
によらいはじげんしたまひてたつ
とき御こゑを出しいはほのみやに
むかひのたまふやういかになんちわれ
をねんする事しゆせうなりさるに
よりてふらうふしのくすりをあたへ
しなりいつまてもこの世になから
へてわがほうをひろめむゑんのしゆ
じやうをさいとしたまへやわれはとう
はうしやうるりせかいのあるしなりとて
ひたりの御てよりこんでいのほけきやう
をとりいだしいはほのみやにた
てまつりいよ〳〵をこたらすわれを
ねんせよすこしも物うき事あらし
とのたまひければひめきみ御きやう
をうけとりたまひあらありたかたの
御事やおなしくはにによらいのすませ
たまふしやうとをひとめおかみたてま
つらはやとのたまへは御そうきこし
めしやすき事さらはとうはうしや
うるりせかいのありさまをたゝいまこゝ
にうつしてみせんとてひがしにむ
かはせたまひてじゆをとなへたまへば
にはかに花ふりおんかくきこえしうん
みち〳〵ててんにんはあまくだりけい
しやううゐのきよくをほさつしやう
じゆはめん〳〵にきかくをそうしひ
めきみをはいしたてまつりたまへは
ひめきみ御らんしてあらありかたの

御事やかゝるきとくにあふ事も
ひとへにやくしの御めくみそとかん
るいをなかしたうとみたまふ御そうお
ほせけるやうはいつまてかくてある
へきそやいまはゝや御いとま申さん
とありけれはひめきみいましはしと
て御ころものそでをひかへたまへはいつ
まてかくてもつきせしまたこそまい
らめとのたまひてこくうをさしてあか
らせたまふひめきみたつとくおほし
めしそれよりいよ〳〵しん〳〵きも
にしみてたつとかりけるさるほと
にちゝみかとこのよしをきこしめし
さてもふしきのしたいかなとてひめ
きみにたいめんありて事のやうを
たつねさせたまひけれはひめきみあ
りのまゝにかたりたまへはさてはたつ
とき事そかしとてそれよりひめ
きみのをしへにまかせてしん〳〵を
おこしやくしの御なをとなへさせた
まひければまことにをしへのことく御
いのちもなかく物うき御事もましま
さすましてわつらはしき事はゆめ
にもなし一てん四かいのうちもあん
をんにおさまりたみのかまともにきや
かにてかんここけむして

とりおとろかぬ

みよにも

こえ

たり

さるほとにみかとかくてもあらまほ
しけれともわれはくらゐをすへり
心やすくやくしの御なをとなへんとて
みよゆつりたてまつるちうあいてん
わうとそ申けるそれよりも御身は
いんにいらせたまひあけくれやくし

の御なをたつとみとなへさせたまひ
けれは御いのちもなかく御かたちもかは
らすめてたくこそさかえたまひけれま

ことにたつとむへき事ゝもなり
なむやくしるりくはうによらい
ありかたし〳〵

※後筆と思量される濁点、振り仮名についてもそのま
ま翻字した。